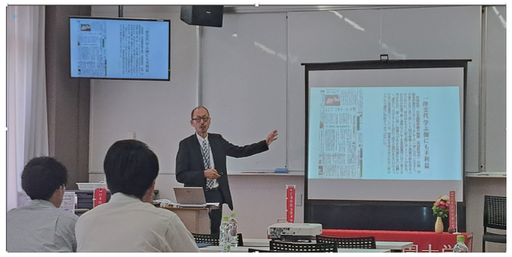
日本国際学園大学 英語教育特別講演会紹介

英語教育学
教授　卯城　祐司(USHIRO Yuji)

「目的や場面、状況に対応する英語リーディングの指導と工夫」

5月17日(金)、6月14日(金)とつくば会場で、5月10日(金)、6月21日(金)と仙台会場で、高等学校の先生方を対象とした、本学教授　卯城 祐司先生による「英語教育特別講演会」が開催されました。以下は、その6月14日(金)の概要です。



日本語訳を超えた理解

本講演に先立ち、5月には、つくば・仙台両会場で、「実際のコミュニケーションを想定したテストで問われているリーディング力とは」と題する講演がなされた。現在、共通テストやTOEICなどでは、様々な場面設定の中で英文が出題され、状況に応じた思考力や判断力が問われている。限られた時間の中で、これらの膨大な量の英文に対応することは困難に感じる受験生も多い。しかし、用いられている語彙や文法の大部分は、中1から高1で学ぶ基本的なものであるという。実際のコミュニケーションを想定した目的や場面、状況に対応できるリーディング力を育てるためには、どうしたら良いか、フロアの参加者に問いかけながら講演が行われた。

6月の講演では、さらに、実践的なコミュニケーション場面での「使える英語力」について焦点を当てて講演がなされた。4技能5領域の1つである英語リーディングも、様々な場面設定の中で、状況に応じた思考力や判断力が必要となっている。そのためには、「一語でも多く頭に入れる」のではなく、「情報を整理する」読み方が求められると力説された。また、インフォメーション・トランスファー (Information Transfer) の概念をもとに、具体的に、どのように学び、また指導すれば良いか、ワークショップ形式で進んだ。

先ずは、現在の英語教育の課題として、①小中高の学校種間の接続が十分でないために学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができていないこと。②「話すこと」「書くこと」などの言語活動が適切に行われていないこと。③「やり取り」や「即興性」を意識した言語活動が十分ではないこと。④読んだことについて意見を述べ合うなど複数の領域を結び付けた言語活動が適切に行われていないことを指摘され、各学校段階の学びを接続させ、「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にすることが重要であると力説された。

そして、先生が教育課題研修指導者海外派遣の「アクティブ・ラーニング (Active Learning)」シニアアドバイザーとして視察された米国の様子なども紹介され、バックワードデザイン (backward design) や、何が出来るようになるか (CAN-DO) 最後の姿を具体的に決めることの重要性。そして、その姿を評価・確認するための方法を決めること（パフォーマンステスト）。さらに、どのように学ぶか（実際の場面→複数領域・統合的、英語を用いて英語を教える）などについて解説された。

続く、ワークショップ形式の演習では、英文の情報をそのままではなく、少し形を変えて理解するインフォメーション・トランスファーの重要性について、comparison-contrast, cause-effect, classification, argument などをまとめるグラフィック・オーガナイザー (graphic organizer) などの具体例を示され、参加者がペアとなって課題に取り組み、その討議内容を描いたものを、卯城先生がその場でスキャナーに取り込み、スクリーンに投影され、各ペアが説明、他の参加者が意見を述べ、最後に先生が解説とアドバイスを送られた。

卯城先生は、これまで47全ての都道府県で英語教育に関わる講演や教員研修をされてきた。小中高の英語の教科書や大学のテキストの代表執筆者も務められ、また、全国的な英語教室の監修や幼児教育の教材作成にも関わられ、講演が理論的でもあり、また明日の授業に直結する実践的なものであった。

5月講演では、離島の高校で教えられた際、島の人々に救われたエピソードを、この6月講演では、退学した教え子からの30年ぶりのメールを紹介されたりと、心温まるお話で締めくくられた。

卯城先生の代表的な著作の一部

■ プロフィール

卯城　祐司（うしろ　ゆうじ）

博士（言語学）。道立高校3校、北海道教育大学釧路校助教授、筑波大学教授を経て、現在、本学教授、筑波大学名誉教授。全国英語教育学会会長、小学校英語教育学会会長、関東甲信越英語教育学会会長等を歴任。日本国際学園大学教授。

授業研究会報告

本学では学内でアクティブラーニングなど新たな教育の手法を共有するという観点から、全専任教員を対象とした授業研究会を毎月1回実施しています。研究会では発表者が報告する授業実践の工夫や課題について、教員たちが活発な議論を交わしています。今回は2023年度10月～2024年2月開催の研究会について報告します。

安達 万里江　助教

【【略歴】京都外国語大学大学院 外国語学研究科博士前期課程 修了
【学位】修士（言語文化学）
【専門分野】日本語教育

■ TGUからJIUへ:変化と不変を考える（2023年10月26日開催）

2023年度より本学で教育職員と事務職員を兼務する中で、前任者の資料等を確認しながら授業運営をし、授業研究会では、安達・亀田（2024）の一部を報告した。

（1）変えないところ：アカデミックレベルの日本語能力を伸ばしていく必要があるが、留学生活や学業に困難を抱える留学生が一定数いるため、個別指導や面談を重視していく。

（2）変えるところ：これまで以上に本学の日本語教育担当者は学内外において組織的な連携を検討しながら、授業運営を進めていく必要がある。

小関 広洋　教授

【略歴】University of Hull大学院 修了、PIMCOアジア担当調査部長、経営コンサルタント
【学位】経営学修士（MBA）
【専門分野】経営学、ファイナンス、マーケティング

■ 年年歳歳花相似歳歳年年人不同（2023年12月21日開催）

私は、日系および外資系の金融機関や経営コンサルタント業務を経験した実務家教員として、本学ではファイナンス論・会計の基礎・国際マーケティング・経済政策・経営史・経営戦略など、ビジネス関連の講義科目を担当しています。

講義には、中国をはじめ多くの留学生が参加していることから、英国と中国に留学した自らの体験を活かし、ビジネス用語とその意味を日本語・英語・中国語で正確に理解できるよう、毎回の授業で工夫しています。また、海外生活で実感した「異文化コミュニケーション」についても、教科書的な解説ではなく自らの経験を話すことで、皆が自分自身の身近なテーマとしてとらえてもらえるよう努めています。

常木 麻衣　助教

【略歴】国士舘大学大学院 グローバルアジア研究科 グローバルアジア研究専攻博士課程 修了
【学位】博士（学術）
【専門分野】考古学、文化遺産学

■ アクティブラーニングの実践を考える（2024年1月25日開催）

今回の授業研究会では、アクティブラーニングの実践方法について検討した。50名以上が参加する大教室でのアクティブラーニングの実践方法について、他の先生方に意見を伺ったところ、概ね最初に課題を出し、ディスカッションの時間を設け、発表を行うという手順で、ディスカッションの時間内に教室内を巡回するとのことであった。その中でも特に大切なのが、「最初の10分間で心を掴む」ということであった。ここでいただいた意見は、人数問わずどのような授業でも応用が効くものであるため、今後の授業内で実践していきたい。

高橋 卓久真　助教

【略歴】京都市立大学 大学院美術研究科 修了
【学位】修士（美術）
【専門分野】デザイン学、情報デザイン

■ 専門領域の立ち位置と教育の実装（2024年2月29日開催）

国際政治経済学者のフランシス・フクヤマが著書Identity(2019)の中で、2010年代に政治論点が「経済問題」から「尊厳を巡る問題」に様変わりしたと指摘した。この「アイデンティティ政治」のダイナミズムが今後日本にもたらすものは、多様性とは真逆の分断である。特にこれまでもあったであろう価値観に対する従来以上の分断が起こると考えられる。

時代が放つ分断は、表現領域に対して一際大きく影を落とすであろう。しかし、我々は「with資本主義」を受け入れ、変化を遂げる社会に適応し生存していく必要がある。それらの環境下で創造性を駆使し、社会に寄与する人間となるには、アートやデザインを「生の技法」として自己テクノロジーとして身体化し、体得した技術を通して自己を定義し、表現できる人間になるまた、未来をサーフするための「不遇を楽しむ術」を修得する。今後も上記の能力が学生に中長期的に醸成されていくような授業内容の充実を図っていきたい。